

11 富士の嶺も立ちそふ雲はあるものを戀のけぶりぞまがふ方なき

にじょういんのさぬき

二条院讀岐

【歌意】

富士山にも寄り添うように雲はかかっているのに、あなたに焦がれる私の恋の思いはその雲にまぎれることもない。

〈鑑賞〉

富士山には雲がかかっていることが多いものです。噴火の煙もその雲紛れることもあるでしょう。けれども、私の恋の思ひ（思火）の煙は紛らわせようがありません、という一首です。

12 道すがら富士の煙もわかざりきはるまもなき空のけしきに

みなもとのよりとも

源頼朝

【歌意】

道の途中、富士山の煙を見ることはなかったなあ。晴れることなく空に雲がかかっていたために。

〈鑑賞〉

この歌は雲に隠れて見えない富士山を詠んでいます。鎌倉幕府初代征夷大将軍の一首。見えても和歌になり、見えなくても和歌になるのがこの富士山なのです。

13 天の原富士のけぶりの春の色の霞になびくあけぼのの空

じえん

慈円

【歌意】

大空にたなびく富士山の煙も、夜明けの空の春の色の霞に紛れるように流れていく。

〈鑑賞〉

夜明けの朝日を受けて、春霞がたなびいています。そこに富士山の煙が重なるように流れていく。富士山の煙の見られる春の夜明けの天空を、おおらかに歌いあげています。

14 人知れぬ思ひをつねにするがなる富士の山こそ我が身なりけれ

ふじわらのいえたか  
藤原家隆

【歌意】

人に知られない恋心にいつも苦しい思いをする私は、駿河の国の富士山のようにだ。

〈鑑賞〉

この歌は六番の歌を踏まえています。(本歌取り) 相手に知られないよ  
うな苦しい恋を「する」私は、駿河するがの国の富士山のように一人で「思ひ  
(思火)」を燃やしているという一首です。

15 富士の嶺にめなれの雪のつもり来ておのれ時しる浮島がはら

ふじわらのさだいえ  
藤原定家

【歌意】

富士山の頂ではいつも見慣れた雪がふもとにも積もってきて、冬の季節  
の到来を、浮島の原でも知られることだなあ。

〈鑑賞〉

「浮島が原」は古来多くの歌が詠まれた「歌枕」です。吉原から原にか  
けて東西十三キロ、南北二キロのかつては沼地だった場所で、江戸時代  
にはここから見る富士が東海道の街道一とも言われました。作者は『新  
古今和歌集』『小倉百人一首』を編んだと言われる日本を代表する歌人  
です。

16 あぢきなくなど下もえとなりにつむ富士の煙も空にこそたて

べんのないじ  
辨内侍

【歌意】

つまらないことに心の中だけで思い焦がれることになってしまったのか。  
富士山の煙も空にむかって立ち上がっていくのに。

〈鑑賞〉

相手に伝えられず、心の中で思い焦がれることになってしまった恋。大  
空に立ちあがるあの富士山の煙のように、皆にこの思いを解き放つこと  
ができたならいいのに、という恋の歌です。

17 富士の嶺の月に嵐や拂ふらむ神だに消たぬ煙なれども

ことばいん  
後鳥羽院

【歌意】

富士山にかかった月に、嵐の雲も吹き払われてしまったのだろう。神様すら富士山の煙は消すことはないのに。

〈鑑賞〉

富士山にきれいに月がかかって雲が切れた様子を、神様でも消せない富士の煙だと表現しています。これは古い歌を踏まえた表現です。平安時代末期から鎌倉時代初期の第八十二代天皇である作者は、中世屈指の歌人でもありました。

18 見わたせば雲居はるかに雪白し富士の高嶺のあけぼの空

みなもとのおさねとも  
源実朝

【歌意】

見渡すと雲のはるか向こうに雪が白く見える。富士山の頂上が見えるあけぼのの空だなあ。

〈鑑賞〉

朝日がちょうど当たったところでしょう。夜明けの空高く、頭を雲の上に出した富士山の頂上が、雪で白く輝く様子を歌っています。十二歳で鎌倉幕府第三代征夷大將軍に就いた作者は藤原定家の指導も受け、「万葉集」「古今和歌集」の探求にも熱心でした。自らの歌集『金槐和歌集』には約七百首が収められています。

19

限りあればぶじのみ雪の消ゆる日も冴ゆる氷室の山の下柴

順徳院

【歌意】

どんなものにも限りはあるのだから、富士山の美しい雪も消える日があ  
るけれど、そんな日でも氷をためる室に敷いた柴には氷が光っているこ  
とだ。

〈鑑賞〉

「氷室」とは当時の冷蔵庫です。山に穴を掘って、「柴」つまり木の枝  
を敷き詰め、氷を保存しておきました。作者は後鳥羽天皇の第二皇子で、  
鎌倉時代の第八十四代天皇です。

20

するがなるぶじのくはこのにひわたは高ねの雪の色に似るらし

藤原為家

【歌意】

駿河の国にある富士の蚕からとった新しい絹の綿は、まさに富士山の頂  
の雪の色に似て真っ白だ。

〈鑑賞〉

「くはこ」とは桑の葉を食べる虫、つまり蚕です。それから取った絹の  
白さを、富士山の雪にたとえています。作者は鎌倉時代中期の歌人で、  
父は藤原定家です。